

佳作

ずっしわすねなうよ、じいちゃん

鹿児島県 鹿児島市立原良小学校四年 中島聖

「今日は、じいちゃんとおばあちゃんと一緒に、夜ご飯を食べるよ。」

と、けい帯を見ながら、お母さんが言いました。私は、楽しみに気持ちが高ぶりました。じいちゃん、おばあちゃんは、近くに住んでいるので、こういうことは月に一、二回ほどあります。

そんなある日、じいちゃんが、息をすることが苦しくて病院に行ったと、お母さんから聞きました。けれども、病院は遠くて、私はすぐには行けませんでした。それから、たい院や入院をくり返し、七月十七日、十四時四十一分に、じいちゃんは息をひきとりました。じいちゃんは、七十一才でした。おばあちゃん、お母さん、おじさんやおばさんに見守られながら息をひきとったので、じいちゃんは、決して心細くはなかったと思います。

それから二日後に、おそう式がありました。おそ

う式には、じいちゃんの会社関係の人が沢山来てくれました。サカキを一周回して、そっとおきました。じいちゃんとの思い出を沢山思いうかべながらおきました。おばあちゃんも私の妹も泣いていて、所所からすすり泣きが聞こえました。そして、大きな箱に入ったじいちゃんの顔のそばに、お花をそえました。私はその夜、じいちゃんに買ってもらった人形とねました。何日かたっても、じいちゃんのことを思い出しては、涙が止まりませんでした。

すると、お母さんから、びっくりする話を聞きました。

「人には、二回死がおとずれるんだよ。一回目は、息をひきとってほねになってしまう時。二回目は、その人のことを覚えている人が、この世からすべていなくなってしまう時。」

その話を聞き、私はじいちゃんの二回目の死がおとずれないように、じいちゃんのことはずっといにわすれないと心にちかいました。

私はじいちゃんのわらっている顔、やさしい声を沢山覚えています。私が生きている間はずっと、じいちゃんのことをわすれません。

今日も、私は手を合わせて言います。

「じいちゃん、大好き。」